Interview

見たことのない世界を感じて「写真」のなかで遊んで欲しい

森下大輔

写真家／もりしただいすけ

profile●1977年愛知県生まれ。静岡大学教育学部中退。2003年東京綜合写真専門学校研究科卒。千葉市在住。2007年「コニカミノルタフォトプレミオ大賞」受賞。2021年小笠原敏晶記念財団現代美術作家助成。2022年「第19回千葉市芸術文化新人賞奨励賞」受賞。個展、写真集出版など精力的に活動を続ける。

モノクロフィルムで撮った写真を、抽象画のような「作品」に仕上げる写真家・森下さんに、プロになるまでの道のりや作品への思いを伺いました

写真を撮り始めたきっかけと、写真家になるまでの経緯を教えてください。

高校生のときによく行っていた古道具屋で、古いフィルムカメラを見つけて買ったのが、写真を撮り始めたきっかけです。大学では、写真部に所属し、暇さえあれば写真を撮って暗室に入り、フィルムを現像して焼き付けてという作業を続けていました。そこですっかり写真に魅了され、21歳のときに写真家になると決めて、写真の専門学校に入りました。専門学校を卒業した2年後に、写真家憧れの「銀座ニコンサロン」で初の個展開催が決まり、そこからプロとしての活動が始まりました。

森下さんの作品には、どんな特徴がありますか？

僕の写真は、35mmフィルムよりも少し大きいフィルムを使う「中判カメラ」を使用して撮影します。モノクロフィルムを好んで使い続け、撮影したフィルムを暗室でプリントするという作業も変わらず続けています。

僕の作品は、写実的な写真というよりも、抽象画に近いものなんです。暗室での現像ムラや長時間露光、逆光によるフレアやアウトフォーカスといった撮影方法や現象を積極的に取り入れながら、面白い偶然を待つことで、目に見えているものとは違う世界を生み出し、作品にしています。

写真家としてのテーマのようなものはありますか？

写真のテーマは持たないのですが、「純粋な写真をつくりたい」という思いは、一貫してあります。写真を撮るではなく、つくっているという感覚です。それは、詩を書くことや絵を描くこと、歌を歌うことや踊ることに近いです。

世界は意味やコードにまみれていますが、僕の作品には読み解くコードがない。意味から外れたものを作りたいんです。作品に個別のタイトルを付けないのも、その作品に意味を持たせたくないからです。意味やコードのない、ニュートラルな空間、余白みたいなものを作ることで、観る人を別の真空地帯に連れて行きたい。それを写真で表現するのは難しいことだけれど、そこがまた面白いんです。

森下さんが思う写真の魅力とはなんですか？

写真を撮るときに、自分が空っぽになる瞬間があります。自由になれると感じる瞬間でもあります。2021年に出版した写真集の「Dance with Blanks」というタイトルは、直訳すると「空白と踊る」という意味なんですが、この「空白」は、物事とつながる「世界」のことを指しています。写真を撮ることは僕にとって、「世界とともに踊る」というイメージなんです。それが写真を撮るときに僕が意図することであり、魅力に感じるところでもあります。

写真家として目指すものと、これからチャレンジしていきたいことはありますか？

今撮っている写真もゴールではないと思っているので、この先も着地をしたくないですね。実験と発見を繰り返し、自分でも予想がつかない方に自分を転がしていく努力をしながら、「純粋な写真」を撮り続けるために、ずっと不安定で居続けたいです。

そして、過去にあったできごとにより傷ついた土地や失われた土地を訪れて、自分にしか撮れない写真を撮ろうと考えています。ドキュメンタリー写真とは違う視点で撮った写真は、どんなふうに仕上がり、見た人の目にどんな世界として写るのか。自分でも予想しきれない新たな作品作りに取り組んでいきます。

読者のみなさんにメッセージをお願いします。

僕の作品を観てくれるひとには、写真に意味を探すことをせずに、作品そのものを直に見てほしいと思っています。そして、写真が好きなひとだけではなく、絵画や詩、哲学や音楽など写真とはまったく別のジャンルを好きなひとに、作品を見ていただけるとうれしいです。来年1月20日（金）～25日（水）に、千葉市文化センターで個展を開催しますので、ぜひ遊びにいらしてください。